

五旬節の説教の中でペトロは、「イエスを、神は主とし、またメシアとなさった」ということを、「イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはならない」、そう言い切った。そうとは知らずに都のユダヤ教徒たちはこの人を「十字架につけて殺した」のであると、ペトロは2回も繰り返して宣言した(23, 36節)。この日の説教は、「神が主とし、またメシアとなさった」方イエスを人々は「十字架につけた」。この大きな罪を、イスラエルの全家にはっきりと知らせる、そういう説教であった。

それを聞いた人々の反応が37節である。

「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と言った。」

「大いに心を打たれる」と訳されているところは、口語訳では「強く心を刺された」と訳されていた言葉(κατανύσσομαι 3複 強く刺す、カタヌスソマイ)である。文字通り、「心を刺す、良心の呵責と良心の痛みを覚える」という表現である。

「どうしたらよいのです」の「どうしたら」というのは、howという質問ではなく、はっきり「何をすべきか」、whatという疑問である(τίς、ティス)。

この質問に答えているのが次の38節以下。

「すると、ペトロは彼らに言った。『悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。』」

この節は二つの命令文からなっている。一つは「悔い改めなさい」。もう一つは「めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受けなさい」という二つである。残りの文章はそれぞれの目的を表したら結果を表したりするような文章。これによって約束されることは、一つは、「罪を赦していただける」、もう一つは「賜物として聖霊を受ける」ことができる。

39-40節。「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、『邪悪なこの時代から救われなさい』と勧めていた。」

40節の「いろいろ話をして」の「いろいろ」と訳されているのは、「たくさん、多くの」という形容詞の比較級であって、「もっとたくさん」、つまり「非常に多くの」言葉を「この他にも」語ったのだという。

「勧めていた」という言葉が示す通り、繰り返し繰り返し、一日中ペトロの説教は他にも数多く語られていた。だから、使徒言行録2章14節以降、今日の40節までに記されているペトロの説教、とりわけ、今日のところは、そういう繰り返し繰り返しいろいろ

説教した中から、一つの具体例としてまとめ上げられている、ということになる。

でもこの日のペトロの説教の要点、勧告の要点は、一口で言うと「**邪悪なこの時代から救われよ**」という、この最後の命令文にまとめられている。

大切なことは、救いというものは「**救われる**」という受身形 (σώζω 動) 命アオ受2複 救う、直す、ソーザー) として表しているように、全く罪人にとっては受身であるという点である。救いに関して、私たちには、私たち自身を救う力は全くない。「**救われなさい**」と言われるように、これはもっぱら神様の一方的な恵みと憐れみによって救っていただくことである。その恵みに身を委ねなさい、と言っているのである。

そうであるけれども、でもまた、救いが私たちの身に及ぶのをただ腕をこまねいて待つのではなく、既にペトロが勧めた通り「**悔い改めなさい。めいめい、イエスの名によって洗礼を受けなさい**」という私たちのなすべきこともちゃんとある。

では身を委ねるべき「**神の恵み**」とは何か。39節に「**この約束**」という言葉がある。「**この約束**」とは、38節全体を、いや、旧約聖書時代から主なる神がイスラエルに啓示して来られた救いの「**約束**」、恵みの契約そのものだ、と考えてよい。(この先の13章31, 32節でパウロは似たようなことを説教している)。

「**この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、……与えられている**」とある。ここで「**子供**」と訳されている言葉 (τέκνον、テクノン) は、新約聖書の中では同じくらいの頻度で「**子孫、末**」という意味で使われている。例えば、ルカ3:8「**神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる**」など。こういう時の「**アブラハムの子たち**」というのは、文字通りの子供のことでなくて、「**アブラハムの子孫たち**」、大人の「**子孫たち**」という意味である。

今日のペトロの説教の場合でも、「**悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け**」なさいという命令に結びついているのであるから、この「**約束**」の対象は大人になった「**子たち、子孫たち**」のことである。

それに対して「**遠くにいるすべての人**」というのは、五旬祭の日に駆け寄って来た世界の各地から一時帰国している各地に離散しているユダヤ教徒、いわゆるディアスポラのユダヤ人と呼ばれる人たちと共に、異邦人、外国人すべてを含む表現(1章8節参照)。

だから、「**あなたがた**」と「**あなたがたの子供たちに**」というのが、時間的に“末永く、いつの世代でも”という意味に対して、「**遠くにいるすべての人**」というのは今度は、空間的に地域的に、エルサレムとかユダヤとかに限らないで世界のどこでも、という広がり、この神の恵みの「**約束**」は及ぶのだと、そう約束しているのである。時間的にも空間的にも制限のない、限りない広い恵み、これが約束されているのである。

「**つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる——しておられる——者ならだれにでも、与えられているものなのです。**」

国籍、民族、人種、男女を問わない、どんな人であってもこの約束に関わりがある。と同時に、ヨエル書3章の最後の一行、その最後にある「**主が呼ばれる……者**」、主が召される者、この者ならば「**だれにでも**」この恵みの約束は当てはまる。つまり、主な

る神の選びと召しが決めてであって、人種とか民族とかそういうものは何の決め手にもならない。

この約束を、まず私たちはしっかりと聴き取っておきたい。

こうした神様の側からの一方的な恵みの約束をいただいている中で、人間の側になすべきことが命じられているのが38節「悔い改めなさい。……罪を赦していただくために」。

「悔い改め」が「罪の赦し」に結果するという結びつきは、ルカの第一巻の終わり24章46節、47節で、復活の主イエスが弟子たちに「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と」、こう言われたものである。「罪の赦しへと至る悔い改め」である。

これが、ルカによる福音書の24章47節では「その名によって」とわざわざ言われているように、イエス・キリストの御名を告白すること、つまり信仰と密接に結びついていると言うか、あるいは含んでいる、そういう「悔い改め」である。

だから、ここでは「悔い改め」が「罪の赦し」をもたらすと言われているが、後ほど、例えば10章43節のペトロの説教では「また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しを受けられる、と証しています」。こちらでは「信じれ」ば「罪の赦し」だと、こう結びついている。悔い改めると罪が赦される、イエスを信じると罪が赦される、これは実は同じこと。同じことの表裏。裏から言うと「悔い改め」、表から言うと「イエス・キリストを信じる」ということ(20:21参照)。

「悔い改め」と訳されている言葉(μετανοέω、メタノエオー)は、「立ち帰る」という意味。今までの生き方を改めて神に立ち帰るという自分の人生の方向転換。神なしに生きていた人生から神に向かって立ち帰る、これを「悔い改め」という。

「悔い改め、立ち帰り」を、一人一人が個別に明らかにする、「めいめい」の「洗礼」。「洗礼」とはそういうものである。

「イエス・キリストの名による洗礼」というのは、3つのことを教えている。

①洗礼の執行が、主イエス・キリストによって権威つけられる(マタイの28章の最後参照)ということ ②「イエス・キリストに結び」つけられた洗礼。私たちがイエス・キリストという方に結び付けられ一体となる、キリストに私は帰属します、ということを表現する儀式という意味がある(ローマ6:3参照)。③イエス・キリストに帰属するならば、当然イエス・キリストの体なるキリストの教会に、私も入ります、こういう入会という意味も持っている(1コリ12:13参照)。

「邪悪なこの時代から救われなさい」の「邪悪」と訳されている言葉は(σκολιός、スコリオス)、「曲がった」とか「よじれた」という意味。そして、この言葉を使う「曲がった時代」という言い方は、旧約聖書では、主なる神に背いたモーセ時代の荒れ野のイスラエルを表すのに「曲がった世代」と呼ばれた(申命記32:5、詩編78:8)。新約聖書では、フィリピの信徒への手紙2章15節などに出てくるが、イエス・キリストを信じない「よこしまな曲がった時代」を表すのに使われている(ルカ9:41、11:29参照)。

この点で言うと、この世というものは、神を認めずキリストを認めない「曲がった時代」である。そういう「時代から救われなさい」。これはいつの時の私たちにも当てはまる促しである。

41節「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。」

ルカは、この使徒言行録を書くに当たり、ユダヤ人がどれだけクリスチャンになったかというくだりでは、人数をかなり気にせずと語っている。ユダヤ人がユダヤ教からキリスト教に変わってきた、それがどれくらいの人かという、そういう記録である。1章5節「百二十人ほど」、今日のところ「三千人ほど」、4章4節「男の数が五千人ほど」、5章14節「男女が主を信じ、その数はますます増えていった」、6章1節「弟子の数が増えてきて」、7節「弟子の数はエルサレムで非常に増えていき」、9章31節「ユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で……信者の数が増えていった」。21章20節「幾万人ものユダヤ人が信者になって」。こう記録している。

42節「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」

「熱心であった」と訳されている言葉は、1章14節で「心を合わせて熱心に祈っていた」、祈りに「執着していた」「固執していた」というのと同じ表現。ここには彼らが固執していた4つの行為が語られている。

1. 「使徒の教え」：ルカによる福音書1章1、2節で「わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに」、その後「物語を書き連ね」てきたと言った。この「最初から目撃して御言葉に仕えてきた」使徒たちの「伝えたとおりに」という一つの基準になるもの、これが「使徒の教え」と呼ばれるもの。
2. 「相互の交わり」：原文ではただ一言「コイノーニア」という言葉が使っているだけ。もともと「共有する、シェアリング」という意味。次の44、45節のような「すべての物」「財産」の「共有」のことであるとも考えることも、また46節に出てくる「一緒に食事」つまり愛餐を表しているとも考えることもできる。
3. 「パンを裂くこと」：ここでは恐らく聖餐式、主の晩餐のことであると思われる。20章7節では「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっている」というふうに、わざわざ日曜日にパンを裂くために集まる、そういう特別な「パン裂き」、つまり聖餐式という意味であると思われる。
4. 「祈ること」：この三千人ほどの人たちは皆ユダヤ人であるから、唯一のまことの神に祈りをささげることについては、生まれた時からずっと行ってきたはず。そうであるけれど、この時から、三千人は全く新しい意味の「祈り」に執着し始めたのである。今までと同じように、天地の造り主である生ける神に祈りをささげる時でさえも独特であった。それは主イエスが「あなたがたは祈るときには、こう言いなさい」と教えられた主の祈りに見られるように、非常に短い簡潔な祈祷であった。それだけではなく「アッパ」に対する親密な信頼感、親近感をもって祈るようになった。